Doc. 1944

(25)

Proc. No.
S. A. No. 15045
Sacks No. 7
Item No. 8977

函 社 別
5158
弗 衆 大
永 議 政 存
社會
5158

偉大なる大東亞たらしめよ

大政翼贊會東亞局庶務部長
岡野龍一氏講演

昭和十七年一月五日
於廣島中央放送局

内務省
17.4.-8
(普通出版)

大政翼贊會東亞局庶務部長
衆議院議員 岡野龍一氏講演
偉大なる大東亞たらしめよ
(非賣品)
昭和十七年三月廿五日印刷納本
昭和十七年三月廿一日發行
廣島市上流川町乙六五
編輯兼發行人 日本放送協會 廣島中央放送局
代表者 杉岡詮
廣島市大手町九丁目二〇三ノ二
印刷所 久保原印刷所
廣島市大手町九丁目二〇三ノ二
印刷人 久保原淳二
電話中一三〇五番
廣島市上流川町乙六五
發行所 廣島中央放送局
〔國定規格「B6」判〕

WM
S45045

序

大御稜威の光明遍き海、陸、空に、皇軍の威武赫々として、大東亞戰爭緒戰の戰果に輝きわたる昭和十七年迎春の感激は、愈々强く、愈々固く、一億倍征の意氣を、必勝必成の覺悟を、銃後の各界各層に透徹せしめたのでありますが、億兆一心の脈管、總力發揮の紐帶を以て任ずる我がラジオの機能についても、眞に一瞬一刻を忽にせざる關係者の眞劍實踐、結束邁進の用意と努力とを、其の昂揚のために、益々集中、傾倒せしむる次第であります。

月月火水木金金の感銘を職域に擴充して、所謂正月休暇も斥けた當局職員は、年初、偶々、衆議院議員、大政翼賛會東亞局部長、岡野龍一氏を迎へて、一場の講演を願ひ、道般の用意、努力を一層的確、有效にし、推進氣魄の錬磨に資すべき涵養、把握を圖つたのでありました。

そして當時聽講し得ざりし管内各放送局職員には、内容の謄寫配付を以て之を及ぼしたのでありますが、一方、新聞紙上、此の講演に、ラジオ受信機を通ずる聽取の期待を懸けしめた記事があり、因て惹起せられた各方面の關心が、遂に圖らざる頒布の希望となつて當局に蝟集し來つたのであります。

本書は即ち、それ等の要望に應へるため、特に講演者の許諾を得て、改めて梓に上すに至つたものであります。

昭和十七年三月　　廣島中央放送局長　中村寅市

偉大なる大東亞たらしめよ

大政翼賛會東亞局庶務部長
衆議院議員　岡野龍一

只今御紹介を受けました岡野でございます。現在福岡縣第三區久留米、大牟田方面から代議士に出て居ります。けれども郷土は廣島縣佐伯郡草津町の出身であります。現在は御承知の通り廣島市に編入されて居ります。私は明けて七十五になる母がまだ郷里に居りますので、年に何回かは墓參を兼ねて歸つて參ります。更に私が時々郷里に歸る理由が一つあります。それは何であるかと申しますと、私は十三の時に父親に別れました。そうしてあらゆる困苦缺乏と戦つて參つたのであります。ところが今日ではどうかからか、人前に出られる様になりまして、中央に於て年中仕事を致して居るのでありますが、夜分の會合にも殆んど毎晩の様に出席せねばならず、私の家で食事をするのは月に二、三度である程、交際も頻繁であります。又地方に旅行致しますとその地方一流の旅館に案内をされる譯で自然生活が安逸化し子供の時の生活とは凡そ掛離れた生活が多いのであります。自分は大いに反省に勉めて居る積りでも、私の日常の都會生活は兎角私の心に緩みを來たすのではないかと、そればかり恐れております。然るに郷里に歸つて參りますと、郷里の山川草木が懐しい事は無論でありますが、子供の時苦しい生活と戦つて來た自分の環境を思い出して、自然に自分の心が引締つて來るのであ

ります。

私の關係致して居ります大政翼賛會では、午前八時五十分に點呼が行はれ、所謂國民儀禮を行ひみんなでラヂオ体操をやつて、それから執務を致しますが、毎晩六時迄、そこで働き夜は又各種の會合に出席せねばならぬ譯で最近は講演に出る暇がありませんが、せめてこの正月の休みだけは、地方へ就中自分の生れ故郷の空氣に接したいために、安藤副總裁に一週間の豫定でお暇をいただきまして、此方に參つた様な次第であります。今晩は私の生れた草津町で講演をする事になつて居りますが、私はこの機會に自分の心を引締めたいと思ひます。私は郷里の山川草木によつて鞭打たれることを喜んで居るのであります。餘談でありますが、そう云ふ意味で、今度歸つて參つたのであります。幸に、諸君にお目にかかつて、私の抱懐致して居ります所見の一端を申上げる機會を得ました事は誠に私の幸と存ずる次第であります。

扨て、私共は支那事變以來、五度目の新年を迎へました。けれども今年位、朗かな實に身内が、ぞくぞくする様な、喜しい新年を迎へた事は始めてであります。多分皆さん方も御同感であると思ひます。實に前途に多大の希望を抱き、輝しい新年を迎へる事が出來たのであります。

御承知の通り、十二月八日には米英兩國に對し、宣戦の布告が發せられたのであります。即ち　大詔を渙發あらせられたのでありますが、あの作戦は實に世界史上に、類例のない大作戦であつたのであります。十二月七日夜半から八日未明にかけて、あの大作戦は行なはれ、一舉香港、グアム、ウエーキ島、フイリツピン、マレー、ハワイ等同時に大攻撃、爆撃が行はれ緒戦三日間にあの赫々たる大戦果を擧げたのでありますから、世

界の各國が驚倒するのは、私は當然だと思ひます。

固より、吾々は精鋭無比なるわが無敵帝國陸海軍に信頼致して居りました。然しながら、斯くの如き大戰果を擧げるとは、想像しなかつたのであります。しかし、あれ程、世界稀に見る大戰果を擧げられたと云ふ事は、全く　御稜威の下、第一線將兵各位の決死奮鬪の賜物である事は云ふ迄もないのでありまして、私共は、實に感激に堪へないのであります。しからば、何故、あれだけの大戰果が擧げられたか、それを逆に申しますと、何故米英は斯くの如き大醜態を演じたのであろうかと、國民齊しく他山の石として反省しなくちやならないのであります。一口に申しますと、アメリカは油斷して居たのであります。その油斷を一つ例を擧げますと、ハワイには御承知の通り、日本人が十數萬參つて居りますが、その第一世、第二世たる日本人の或る集會の席上で、米國大平洋艦隊司令長官のキンメル提督は、日米關係が最惡になり萬一戰爭が起つたら日本は必らず、フイリツピンを攻擊するであらう。そうなれば、アメリカ、布哇に來て居るフイリツピン人は日本人に對し、迫害を加へる樣な事があるかも知れないが、しかしその場合私は決して偏頗な不公平な事はしない。日本人諸君に對しては、どこ迄も公正な取扱をするから、どうか諸君は平靜に沈着を守つて貰ひたいと云ふ事を云つて居るのであります。流石のキンメルも日本がフイリツピンに攻擊を加へると云ふ事には、氣が付いてゐたのでありますが、足許のハワイを一氣に攻擊するとは、思つてゐなかつたのであります。如何に油斷してゐたかと云ふ事は、この一事を以てしても分るのであります。然らばこのアメリカの油斷は何處から來たかと檢討して見ますと云ふと、それはかの大正十一年に開かれたワシントン會議即ち軍縮會議に逆つて、考へて見る

必要があるのであります。このワシントン會議に於ては御承知の通り英國と協同戰線を張つて日本を壓迫致し、遂に五・五・三といふ比率を押付けてしまつたのであります。當時わが國内には囂々たる議論があつたのでありますが、四國の情勢上我慢せざるを得なかつたのであります。越へて翌大正十二年には彼の石井ランシング協定を破毀されて居ります。此の協定は大正六年にわが石井大使とランシングとの間に締結された支那に於ける日本の特殊地位、特殊權益を認めたる日米間の協定であります。然るに斯くの如く日本に取つて重要なる協定を彼の一方的意思に依つて弊履の如く捨て去つたのであります。

更に大正十三年には全面的排日法案を議會に於て成立せしめて居ります。その當時わが米國駐劄埴原全權大使が國務卿に送つた書簡の一節に、若しこの法案が成立するならば日米國交上『重大なる結果』を生ずるであらうと云ふ文句があつたのであります。ところが米國は非常に忿りまして、その重大なる結果とは何を意味するのであるか、日本は戰爭をするつもりかと大變な騒ぎとなり、帝國の議論も非常に沸騰しましたが、此の時も亦日本政府は四圍の情勢上止むを得ず軟弱外交と言はれる位、隱忍自重の結果無事に納つたのであります。斯くの如くワシントン會議以來、一段と對日壓迫の手を加へて來たのでありますが、帝國は後日を期して飽迄も事を平和裡に解決せんとしたのであります、しかし、そのためアメリカは益々增長して、日本はどんな目に會はされても立上る餘力がないと、實に馬鹿にしきつて參つたのであります。更に日本を馬鹿にする原因は何かと申しますと、それは支那事變以來日本の經濟力を過小評價して已に破滅に頻する如く又財政は破綻に近づきつつあると云ふが如き彼等の認識不足であります。わが國の底力を知らぬ彼等としては無理もありません

が、こう云ふ譯で愈々日本を馬鹿にして居つたのであります。特に彼等は日本の國論不統一に基く、人心の攪亂分裂と云ふ事を、對日謀略としてとつて參りました。即ち日本には現狀維持派と現狀打破派、つまり、米英派と獨伊樞軸派に屬する二つの流れがあつて、それが相互に爭つて居るがこの親米英派をうまく操縱すれば結局日本の國論は指導出來る。どうせ日本は米英側に、屈服するものと思つて居たのであります。

申す迄もなく、彼等はスパイ網を、わが國の政界、財界、學界等各階層に屬する人々の間に布き、そうしてその知り得た日本國内の情勢を、一々彼等の本國に送つてゐた事は、御想像に難くないと思ひます。その一つの現れとして、かの○○○○の狙撃事件が、吾々日本人の知らない内に、既に彼等の本國に知れ渉つて居たのであります。そう云ふ事については、彼等は吾々日本人より以上にわが國内事情を、一々よく調べて居るのであります。殊に銀座街頭に於ける蜿蜒たる一列買出の情景等を寫眞にとりまして、彼等はそれを本國に送り、如何に日本が物資不足に惱みつつあるかと云ふ惡宣傳資料と致して居るのであります。しかしこれ等は今日から見ると、却つて外國のスパイをスパイした樣な結果になつたとも謂ひ得るのでありますが、そう云ふ譯で彼等は日本に對し、如何に無理難題を云つても、日本は結局、その國内に於ける現狀維持と現狀打破との兩派の對立によつて、國内統一を缺き、如何ともなし得ないものと思つて居たのであります。その外吾々は實に殘念でたまらない事が澤山あります。例へば大政翼贊會發足以來の翼贊會に對する議會舊体制の攻擊等々默つて居れない事が澤山ありますが、今日は之を省略致します。かような譯で兎角、日本の國内情勢は、國防國家体制確立、擧國一体の眞の確立と云ふ事が、出來なかつたために、米英兩國から輕蔑される重大なる原因となつたの

であります。御承知の通り、わが海軍力は、ワシントン會議の結果、米英兩國に比し、五對三になつてしまつたのであります。日本はこの三の力を以て、五の力を持つ米英兩國に對抗する事となつたのであります。即ち米英兩國は、その力を合せると十になりますが、その十の力に對し日本が三の力を以つて對抗するには、どうしても飛行機と潜水艦に依る外はないと、わが海軍に於てはあらゆる苦心を拂はれたのであります。

私共が常務理事としてお世話を致して居ります大日本興亞同盟の總務委員である高橋三吉大將の苦心談を聞きますと、飛行機が航空母艦から飛出す時は樂だそうでありますが、然し航空母艦に歸つて來るのは、なかなか困難だそうであります。それがためにどれ程、多くの犧牲を出したか、知れないと云ふ事であります。此の着艦技術に始めてうまく成功したのが、現在は少將として某航空隊長である吉良俊一少佐でありますが、しかし、これも最初はうまく行かず過つて負傷をされましたが、幸に重傷でありませんので「何クソ」と勇を鼓して決死の覺悟でやり直して漸く二度目に辛うじて着艦される事が出來たと云ふ事であります。全く吉良少佐の精神力には頭が下ります。それに依つて、降りる呼吸が分つたものですから、段々自分の部下にそれを敎へられたのだそうであります。聞くところに依りますと、霞ケ浦飛行隊に於て、空の犧牲となつた者は、相當多數に上つて居ると云ふ事でであります。支那事變以來の犧牲者よりも、その平素の猛訓練に於て犧牲になられた將兵の方が、多いと云ふ事を承はつて居ります。最近かの少年航空兵に志願するものが頓に增加致し今回の大東亞戰に於ても立派な武勳を立てて居りますが、これ等の志願者は固より身命を　上御一人に捧げる決心で、志願致して居るのであります。全く死を鴻毛の輕きに比し最初から死を覺悟して居るのでありまして、命の欲

しい者は、航空兵には志願出來ないのであります。その少年航空兵の希望者が日增に多くなることは、皇國の爲洵に慶賀に堪へません。アメリカ人は、冒險好きでありますが、然しながら、彼等は冒險好きから、宙返りをやつたり、其の他所謂高等飛行をやるのは、いはば輕業でありまして、一種のスポーツであります。從つて命掛で本當の體當りでやると云ふ、日本の將兵とは違ふのであります。殊に米國では水兵が大演習がありますと、脱走するものが段々出來ると云ふ事でありますが、それはもと〳〵、その精神が日本人と違ふからであります。日本人の樣に盡忠報國と云ふ忠誠の念を、持つて居ないからであります。固より彼等にも、その生れた國を思ふ愛國心はありませうが、日本人とはその精神が根本的に違ふのであります。御承知の通り、わが陸海軍は大東亞共榮圏確立のために、決死勇躍夜陰も曉もなく、マレーに、フイリツピンに次々にその偉大なる戰果を擴大して居るのでありまして、支那事變以來起つたその數々の美談を纏めれば、實に浩瀚なものになると思ひますが、吾々は本當に心から感謝せざるを得ないのであります。わが無敵海軍の猛訓練は勿論、かの敵前上陸の訓練に致しましても、既に早くから假想敵前上陸地を目標として遠大なる計畫の下に、即ち今日ある事を豫期し非常な努力を以て、その訓練を致されたのでありまして、吾に必勝の備へがあつた事が今日の大勝利をかち得た原因をなして居るものと、私共は考へるのであります。

然るにその間、アメリカは日本に對して、如何なる態度をとつて居つたかと申しますと、只今申しました樣に、日本の足許を見透し、傲慢無禮な、人を馬鹿にした態度を取ると同時に、昭和十六年から同二十一年に至る六ケ年計畫を以て、陸海軍を整備擴充する爲に大軍備擴張案を樹てたのであります。即ち陸軍の常備軍を二

百萬に增加し飛行機を五萬機に擴張すること、又海軍は三百五萬噸七百一隻と云ふ現有勢力の二倍半にする、これだけの海軍を持てば如何に日本が威張つても、日本海軍を全滅せしめることが出來ると考へて居つたのであります。七百一隻の內譯を申しますと、戰艦三五、航空母艦二〇、巡洋艦八〇、驅逐艦三八六、潛水艦一八〇であります。

次に亞米利加の政戰兩略の一致と云ふことに就いて、申上げたいと思ひます。アメリカは從來政略的に、又外交的に日本壓迫にかかつて居りましたが、戰略の方は左程攻勢に出てはゐなかつたのであります。この一、二年來政略と戰略とが一致して來たのであります。茲に其の一例を申上げます。即ちかのキンメル提督一派はアメリカに於ける對日强硬論者でありますが、一方自重論者は今、日本と戰爭を始めたところで、とても勝目はないから、昭和二十一年、即ち米國が大海軍力を持つ迄自重して昭和二十一年以後に於て、日本をやつつけてやらうではないか、少くとも茲二、三年は時機を待つべきであると、主張したのであります。ところが一方强硬論者側では、そんな馬鹿な事をいつてはいけない、同盟國のイギリスはドイツ軍に敗けては居るが幸に英國海軍は未だ健全である。このイギリス艦隊が健全ならば、アメリカの大西洋艦隊を大平洋に廻すことが出來る。即ち、米國の大平洋艦隊に加ふるに大西洋艦隊を合流せしめて日本に當れば、大丈夫日本海軍が如何に强くてもやつつけることが出來ると云ふのであります。米國の內部に於て之等自重、强硬の兩論が對立して居りましたが、次第に强硬論が優勢になつてルーズヴエルト大統領は、遂に對日强硬派の急先鋒キンメル提督を拔擢して大平洋艦隊司令長官に任命したのであります。キンメルは四十六人の先輩を追越して司令長官に任命さ

れた譯であります。米國は一面軍備擴張政策に力を入れると共に以上申上げました樣に政戰兩略を一致せしめて來たのであります。これでは油斷がならぬと云ふ事から日本としては、いやが上にも、充分それに對する用意を致したのであります。今回の大作戰に依る赫々たる戰果のよつて來るところは、彼に油斷があり、吾には必勝の備があつた結果であると、お考へになればよいと思ひます。

次に問題になります事は、ロシヤの動向でありますが、實はこの戰爭前から南方に進出せんとする日本としてはロシヤが如何なる態度を取るであらうかと、吾々は非常に心配してゐたのであります。既に新聞で御承知の事と思ひますが、建川大使が、モスコーに於て屢々ロシヤ當局と折衝致して居るのであります。一方イギリスは、イーデン外務大臣が秘密裏にモスコーに自ら赴き、ソ聯を反樞軸國側に引込むべく、あらゆる努力を拂つて居るのであります。一方又十二月二十二日には、チヤーチルが飛行機でワシントンに行き、ルーズヴルトと種々重要協議をやつてゐるのであります。その談判の內容の第一はソ聯を如何にして大平洋戰爭に對し、積極的に協力せしめ樣かと云ふのであります。第二はアフリカに於けるフランスの海軍力及び軍事施設を、ドイツに使はしてはいけない。そうする爲には、先づアフリカに兵力を增派して、ドイツを牽制しようと云ふのであります。其の他色々ありますが吾々に直接關係のある大平洋戰爭に、ロシヤを引入れ樣といふ相談は、現在の情勢から見て、ロシヤは米英側には、動かされないと思ひます。といふのは、イギリス、アメリカが、ロシヤに對し、交換條件としてその必要とする物資を與へ樣としても、事實問題としてはそれを送ることが出來ないのであります。西南大平洋の制海權と制空權を日本が持つてゐるので、米英がどんな甘言を以てロシヤを口

說いても、ロシヤ側には軍用品其の他の物資を受取ると云ふ確信がつかないのであります。それ故此の米英のロシヤ抱込策は、成功しないものと見て居ります。申す迄もなく、大東亞共榮圈を完成致しますには、北方の關係を無視することは出來ないのであります。よく、南進論をやる人がありますが、しかし大東亞共榮圈を確立するためには、北方を見逃す事が出來ないのであります。即ち北方を忘れて大東亞共榮圈は、あり得ないと思ひます。最近の情報はよく存じないのでありますが、ロシヤは獨ソ戰爭以來滿ソ國境に相當の部隊を增強致して居るのであります。日本に向つての國境軍備は少しも減らして居らない。彼等は滿ソ國境方面に對し、われ〳〵の想像以上に重點を置いて居るのであります。故に吾々と致しましては、この大東亞共榮圈との關係について、その動きを見逃す事が出來ないのであります。

そこで、この大東亞共榮圈の問題でありますが、大東亞戰爭はまだ緒戰に過ぎないのであります。緒戰に於て赫々たる戰果を擧げたと云ふことは、未だ緒戰の終つた事を意味しないのであります。政府の方針と致しては、香港が攻略されたとき、祝賀會をやるか、どうかと云ふ議論がありましたが、香港の陷落で、祝杯を擧げるのはまだ早い。新嘉坡が陷落したら國民全般が始めて、祝賀會を催すと云ふ事になつたのであります。それはこの新嘉坡の陷落を以て、緒戰の終りと見るからであります。新嘉坡が陷落すれば、お互に相當祝賀氣分を分ちたいと思ひます。相當祝賀氣分を、味合ふがよからうと思ひます。しかし飽迄時勢を辨へ、增產の障害にならぬ樣又資材を濫費せぬ樣に注意致したいと思ひます。尙祝賀は單にお祭り騷ぎでなく、わが忠勇無比なる皇軍將兵に感謝の誠を捧げると共に、大東亞共榮圈確立の爲に彌が上にも、銃後の固めを强くすると云ふ

佐藤少將（賢了）ノ講演放送ヲ聞ク、不問意見

ところに、意味があるのであります。次に大東亞戰爭の第二期と申しますと、たとへ新嘉坡が落ちてもまだまだスマトラ、セレベス、爪哇等一面武力戰をやると同時に、建設をやつて行かなければならない。即ち軍事上、經濟上重要なる地點に於きましては、大いに作戰を進めると同時に開發工作をやつて行かなければならないのでありますが、此の時期を第二期と見てよからうと思ひます。それから第三期と致しましては、現に、日本の必要物資であるゴム、錫、マニラ麻、砂糖等々を日本本國に運んで來て、その運ばれた物資に依つて國防國家体制の確立に資することの出來る時期と見るべきでありませう。要するに第一期、第二期、第三期共に支那事變と違つて、前途に非常な希望を持つ事が出來るのであります。

ただ此處に注意をしなければならぬ事は、占領地區工作の問題であります。實は大日本興亞同盟に於ては、占領地區工作委員會と云ふものを作りまして研究して居りますが、この事は既に外務省でも研究して計畫中との事であります。勿論興亞同盟に於ては政府と表裏一体となり南方問題についてあらゆる角度から研究を進めつつあるのでありまして、かの支那事變で嘗めたその苦しい經驗を再び踏まない樣に致したいと思ふのであります。申す迄もなく支那占領地區に於ける民心宣撫工作は、率直に申しますと決して成功と云ふ事は出來ないのであります。寧ろ失敗と云つてもよいのでありまして、この占領地區に於ける民心を把握するためには、餘程注意しなければならないと思ひます。從つて南方に於ける占領地區の工作を、どうするかと云ふ事はなかなか困難な問題でありますが、しかし支那の占領地區に於ける工作とは、餘程遣方に於ても異なる所がなければなりません。支那四億の民は悉く蔣介石の抗日政策に依つて教育されて居りますので、その工作はなか〳〵甘

く行きかねますが、南方諸民族はもと〳〵抗日ではないのでありますから、南方進出の日本人が心から大東亞共榮圏の眞義を理解して彼等を愛撫してやる事が何より大切であります。從つて立派な人間を向ふに送ると云ふ必要がありますが、南方工作がよく行くか、どうかと云ふ事は今後南方へ進出する邦人の心構と努力に俟たねばなりません。

次に南方資源の開發問題に付、聊か所見を申上げたいと思ひます。南方資源の開發と一口に申しますが、實際問題となりますと御存じの通り簡單には參り兼ねますのでこれが對策に付ては、大いに檢討を要することと思ひます。南方資源の開發は差當り砂糖、ゴム、コーヒー等の農產物の方は開發と言ふよりも、現在生產せられて居る農產資源の捌け口を如何にするかと云ふ、生產調整の問題の方がより重大であります。即ち南洋圏に出來る砂糖、ゴム、コーヒー等の過剩生產を如何に調節するかと云ふ問題が肝要であります。此の問題の處理を良くやりませんと土着住民の生活を脅威することになり延ては所謂善意の惡政となつて、わが日本が大東亞諸民族の怨府となる恐れがあると思ひます。故に具体的施策になると、十二分の注意を要する譯であります。そこで當面せる資源の開發問題は地下資源、即ち鑛產物に重點を置くべきであらうと思ひます。今日は時間の關係上詳細は省略いたしますが、之を要するに萬邦をして各々其の處を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしめると云ふ大御心を体して、大所高所より大國民の襟度を以て彼等を愛撫することが、民心を得る所以であり大東亞共榮圏建設の捷徑なりと確信するものであります。

それに就いて、ここに考へねばならぬ事は、教育問題であります。只今申しました樣に、支那では宣撫工作

が甘く行かない、民心收攬工作が甘く行かないのであります。それは現地に行つて居る日本人の大部分の責任であります。つまり現地に於ける日本人の教養が低いと云ふ事が、原因であります。そこで日本が大東亞共榮圏建設の本當の盟主として立つて行くためには、先づ日本人の教育の刷新向上を計る必要があるのであります。從來の樣に自由主義の教育ではいけない。わが國體の本義に徹して、必要なる科學をしつかり教へ込む事が大切であります。從つてそれに必要なる指導者、即ち教職員の養成、其の他大東亞教育再檢討と云ふ根本問題になるのであります。而して此の教育問題中の制度の問題になりますが、人口問題と關聯をもつ問題で、大いに研究を要する問題があります。

今更茲に改めて申上げる迄もなく、支那事變以來わが國は多大の物資を消費した事は事實であつて、物資の不足と云ふ事が問題になつて居りますが、物的資源の不足もさることながら、私は人的資源の不足、即ち人口問題は最も重要問題の一つであると思ひます。目下厚生省が中心となつて產めよ殖せよ發展せよと大童になつて力瘤を入れて居りますが、洵に結構な事でありますけれ共、それは根本國策として極めて當然の處置でありませうけれども、應急策も種々講究實施されねばなりません。そこで國民皆勞運動が起りまして當面の生產力擴充、增產の爲めに必要なる人的要素の充足を計ることになつたことは、皆樣御承知の通りであります。斯くの如き見地に立つて今日の學制を考へて見ますと云ふと、果して今日の如く中等學校から高等學校、大學と二十五、六歲迄も引續き學校に通ふと言ふ制度は、今日の時局に於て如何なものでありませうか、陸海軍に於て士官學校、兵學校等を了へたものを一應隊附にして實務に就かしめ、其の中から優秀なものを選拔して陸海軍

大學に入學せしめられる制度は、一般の專門學校、大學等に於ても研究の上、實施せらるべきものではないかと思ひます。何れにしましても大東亞共榮圏の確立と教育問題、人口問題は官民一体となつて眞劍に考へなければならぬ重大問題と考へます。

今大東亞共榮圏の完成に向つて驀進しつつある日本は、廣大なる大東亞に直面して居るのであります。この地圖を御覽の通り、實に廣大なる大東亞であります。この大東亞を日本が指導開發せねばならないのであります。しかも國防上、經濟上必要なる物資と云ふ物資は悉くこの大東亞共榮圏內にあるのでありますから、この大東亞共榮圏の完成を目指す日本は實に旭日昇天の勢であります。私はこれを思ふとき、前途に大なる希望を持つことが出來るのであります。

私は支那事變以來の情勢を察して、昭和十六年が日本にとつて一番危機だと思ひました。私は豫言者ではありませんが、何んとなくそう云ふ豫感が致したのであります。丁度、昭和十六年はその通りでありました。支那事變以來、既に五年になるのであります。もう日本が手を擧げさうだと、蔣介石は思つて居たかも知れません。しかし昨年の十二月八日以來、形勢一變してこの蔣介石を助けて居る米英は、もう今日ではどこからも、援蔣行爲をやる事が出來なくなりました。日本は今、かう云ふ有利な地位に立つて居るのであります。此の自然の廣大なる大東亞、これを、私共はお互の手に依つて、偉大なる大東亞にしようではありませんか。吾々は、この輝しい前途に對する愛着の念を、禁ずる事が出來ないのであります。ただ問題なのはこの皇軍の赫々たる戰果に應へるために、內を固める事、即ち國內態勢の强化であります。この國內態勢をどうするかと云ふ

事であります。そこで問題は多岐に亘るのでありますが、大政翼賛會に依つて、これが國内運動となりつつあるのであります。この事について、安藤副總裁は非常に熱意を持つて居られるのであります。大政翼賛會では陣容強化のため、一部改造を斷行されるかも知れません。私はこの際大政翼賛運動、職域奉公の運動を大いに展開しなければならない、極めて強力に展開しなければならないと、考へて居るのであります。

中上げたい事は澤山ありますが、今日はこれを以て私の講演を終ります。

—昭和十七年一月五日於廣島中央放送局—

Printed Pamphlet Notice
"Make a Noble ~~Seducements of~~ A Greater Eastern Asia
OKANO, Takeichi
MAR. 1942 PP15
#897

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1944 Date: 18 June 1946

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: "Make a Noble Greater East Asia -- Be Great East Asia."

Date: 5 Jan. 1942 Original (X) Copy ( ) Language: Jap.

Has it been translated? Yes ( ) No (X)
Has it been photostated: Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: Home Ministry

PERSONS IMPLICATED: OKANO, Tatsuichi MP; NAKAMURA, Toraichi

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Incitement to continuation of aggressive warfare.

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

Radio lecture made by OKANO, Director of the Bureau of General Affairs of the IRAA East Asia Department on 5 January 1942. Pamphletized by NAKAMURA, Toraichi, Chief of the HIROSHIMA Broadcasting Station by permission of the lecturer in March 1942.

Page 7 - "The Japanese invincable armada has been trained with an ambitious plan. There is already a projected landing place on the hostile coast."

Page 9 - "Concerning the attitude of USSR towards the war of Greater East asia. Frankly speaking, the Japanese people have been concerned over Russia's attitude, because Japan has had the intention of a move toward the South before the war. Mr. TATEKAWA, Japanese Envoy to the USSR, in negotiating with Soviet Russia in Moscow.

Page 10 - "Some Japanese people state that Japan should advance in the South without paying attention to the North. I believe that their opinion is wrong. The completion ofthe Greater East Asia Co-Prosperity sphere will not be done without paying great attention in the North. The Greater East Asia Co-Prosperity sphere cannot exist without paying heed to the vital problems in the North. Russia has increased her troops along the Russian-Manchukuo border since the Russo-German war. She has been paying greater attention to the frontiers than the Japanese people realize."

Analyst: Lt. Goldstein

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1944 Date 5/25/46

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: "Make a Noble Greater East Asia -- Be Great East Asia!"

Date: 5 Jan. 1942 Original (X) Copy ( ) Language: Jap

Has it been translated? Yes ( ) No (X)
Has it been photostated? Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: Home Ministry

PERSONS IMPLICATED: OKANO, TATSUICHI MP.

PERSONS TO WHOM DOCUMENT APPLICABLE: NATAMURA, TORAICHI

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:

Pretext to continuation of Japanese war

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

Radio lecture made by OKANO, Director of the Bureau of General Affairs of the IRAA East Asia Department on 5 January, 1942. Pamphletized by NATAMURA, TORAICHI, Chief of the HIROSHIMA Broadcasting Station by permission of the lecturer in March 1942

Page 7 "The Japanese invincible armada has been trained with an ambitious plan. There is already a projected landing place

Analyst: Lt. Goldstein Doc. No.

WAW (over)

on the hostile coast."

Page 9 "Concerning the attitude of U.S.S.R. towards the war of Greater East Asia. Frankly speaking, the Japanese people have been ~~on~~ concerned over Russia's attitude because Japan has had the orientation of a move toward the South before the war. Mr. TATEKAWA, Japanese Envoy to the USSR, is negotiating with Soviet Russia in Moscow."

Page 10 "Some Japanese people state that Japan should advance in the South without paying attention to the North. I believe that their opinion is wrong. The completion of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere will not be done without paying great attention in the North. The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere cannot exist without paying heed to the vital problems in the North. Russia has increased her troops along the Russia-MANCHUKUO border since the Russo-German war. She has been paying greater attention to the frontiers than the Japanese people realize."

Ro.

1944

Translated by S. Onamiya

Proj No. 258
S. A. No. 15045
Sack. No. 7
Item No. 897

TITLE "MAKE A GREATER EAST-ASIA NOBLE"
"Be Great East-Asia!"
lecture made by M.P. Tatsuichi OKANO
Director of the Bureau of General
Affairs of the Department of East-Asia
of the Imperial Rule Assistance Association

DATE January 5, 1942
through the Hiroshima Broad-casting Station

NOTE The pamphlet is made by Toraichi NAKAMURA
Chief of the Hiroshima Broad-casting Station
with permission of the lecturer in March
1942

No. 1

PAGE 2 1. concerning Japan's declaration war against England and America

2. concerning Japan's victory in the great operations — Hongkong, Guam, Wake Is., Philligines, Malay and Hawaiian Islands in only three days at the beginning of the war

PAGE 3 1. Ewen Kimmel, commander-in-chief of the American Pacific Fleet didn't know Japan would attack Hawaii.

PAGE 4 1. With the ratio of 5: 5: 3, England and America established a united front against Japan in the Washington Conference.

2. Mr. Uehara, Japanese ambassador plenipotentiary to America, had sent message to Secretary of State saying that a serious result would occur in the diplomatic relations between Japan and America — when America had passed the anti-Japanese bill.

in 1923.

3. America has undervalued economic power in Japan since the China incident broke out.

PAGE 5 1. American's intrigue against Japan — based on an ununification of the public opinion in Japan — the two big streams of the public opinion in Japan — One — stream for England and America — the other — stream for Germany and Italy

The enemies (England and America) thought that they could win over Japan controlling the public opinion in Japan for them

No. 3

PAGE 6

The power of navy in Japan has been reduced at the result of the Washington Conference. — 5 — 5 — 3.

The navy of Japan cannot take hostile action against the combined strength of navy of England and America — with the ratio of 10 : 3.

Therefore Japan thought that she cannot fight against the two enemies without the great help of aeroplanes and submarines.

No. 4

PAGE 7

1. The American people like adventures in nature.
The American fliers often do acrobatic feats in their aeroplanes.
I can say that they are acrobats.
The Japanese soldiers always fight at the cost of their lives.
I hear that the American sailors often escape from their duty when the grand manoeuvres are held.

2. The Japanese invincible armada has been trained with an ambitious plan
She has already had an imaginary landing-place on a hostile coast.
I believe that the above-mentioned facts are the very cause of victory of Japan

No. 5

PAGE 7 3 The American people have under-valued the national power of Japan.
The attitude of America toward Japan has been always arrogant.

America has made a great military expansion plan with a six-year plan— 1941—1946.

PAGE 8 The military expansion plan of America is as follows:

A. The strength of the standing army — 2 million men

B. The number of aeroplanes — 50,000

C. The strength of the navy — 3,050,000 ton — the number of warships — 701 (two and a half of the present force)

No. 6

PAGE 8 D The items of warships are as follows.

(1) Battleship ——— 35

(2) air-craft-carrier ——— 20

(3) cruiser ——— 80

(4) Destroyer ——— 386

(5) Submarine ——— 180

TOTAL: ——— 701

No. 7

PAGE 8

4. Concerning {conformity / compatibility} of strategy and politics in America.

Politically and diplomatically the American people have been oppressing the Japanese people.

The strategy in America has not been so advanced against Japan as the politics in America.

The strategy and politics in America, has come together one or two years since.

5. Admiral Kimmel and his party have taken firm attitude against Japan.

Some pacifists in America asserted that America should never fight with Japan until she will have the great naval power.

The bellicose people in America have won over the pacifists in the country.

Finally President Roosevelt has appointed Kimmel Commander-in-chief of the Pacific fleet.

No. 8

PAGE 9 1. Concerning the attitude of the U. S. S. R. towards the Greater East-Asia war.

Frankly speaking, we Japanese people have been anxious about the attitude of the U.S.S.R. because Japan has had an intention of advancement to the South before the war.
Mr. Tatekawa, Japanese Envoy to the U. S. S. R., is negotiating with the Soviet Russia in Moscow.

PAGE 10 2. From my private opinion, I think that England and America can never induce the U. S. S. R. to fight against Japan.
The enemies have a good bait for Russia.
But they cannot give her it.
Japan has the command of the sea and air over the South-West Pacific.
I believe that the enemies cannot cajole Russia into the war.

No. 9

PAGE 10

3 Some Japanese people assert that Japan should advance to the South without paying attention to the North.
I believe that their opinion is wrong.
The completion of the Greater East-Asia sphere of co-prosperity will be brought to us without the greatest attention to the North.
The Greater East-Asia sphere of co-prosperity cannot exist without thinking of the vital problems in the North.
Russia has increased her troops in the frontiers between Russia and Manchoukuo since the Russo-German war.
She has been paying greater attention to the frontiers than the Japanese can say.

4. Anyhow the Greater East-Asia war has just set on its start.
The success of the Japanese troops at the first stage of the war does not mean that the war has come to an end.

No. 10

PAGE 11 1. Concerning the problem on operations in the areas of China occupied by the Japanese troops

The Japanese pacification towards to the minds of the Chinese people can be said to be a failure, to tell the truth. We cannot be too careful in the work of grasping the popular feeling in the occupied zones.

This is the hardest work.

The pacification in the South is different from that in China.

The Chinese people have been disciplined by the anti-Japanese policy of Chiang Kai-shek. The pacification in China was very hard.

The peoples in the South have never been in anti-Japanese policy or movement.

It is most important for us Japanese to love and lead them with full understanding of the real meaning of the Greater East-Asia sphere of co-prosperity.

No. 11

PAGE 14

1. Considering from the situations in Japan from since the China incident occurred, I thought that the year of 1941 will be most serious to Japan.
Something has made me think so.
My presentiment is realized!
Japan has been fighting with China these five years.
Chiang Kai-shek probably thought that Japan might be defeated before long.
The situations surrounding the world have suddenly changed since the Greater East-Asia war.
England and America cannot help Chiang Kai-shek any more.